

連載 プロマネの現場から 第 80 回 式年遷宮プロジェクト

蒼海憲治(大手 SI 企業・金融系プロジェクトマネージャ)

先月号で、お伊勢参りをしたことを書きましたが、お伊勢さんは、昨年、式年遷宮の年でした。式年とは、「定められた年」という意味で、伊勢の場合、20年毎に社殿を建て替え、新たな社殿にご神体を移すということが行われています。第1回目は、飛鳥時代の西暦690年、持統天皇の時に行われ、途中、応仁の乱等戦乱の時代の中断を除いて約1300年続いており、今回は62回目でした。

伊勢神宮は、正式名称を「神宮」といい、皇大神宮（内宮）と豊受大神宮（外宮）の2つの正宮を中心に、14の別宮、119の摂社・末社による合計125の神社により成り立っています。昨年は、正宮の式年遷宮が行われ、今年は、別宮が順次行われました。私がお参りした時は、内宮の別宮である月讀宮（つきよみのみや）が遷御の直前だったこともあり、新・旧両方のお社を見ることができました。

ところで、この式年遷宮は、新しいお社ができて、古いお社から新しいお社にご神体が移される、その実に8年前から開始されています。また、お社の建築に使用される檜などの木材の調達には、200年計画の超ロングランの一大プロジェクトといえます。今回は、この式年遷宮というプロジェクトを少しみてみたいと思います。

伊勢神宮の素晴らしさを、建築家のブルーノ・タウトは、こう表現しています。

「伊勢は世界の建築の王座だ。

芳香高い美しい檜。

屋根の萱、

この単純な材料で他の追随を許さない。

しかも正確にはいつこの形式が出来たのかも、最初にこれを造った人も伝わらない。

おそらく、天から降ってきたのだろう」

当然ながら、美しいお社とそれを取り巻く自然は、天から降ってきたわけではなく、式年遷宮にかかわる人たちの営々とした努力によって成り立っています。今回の式年遷宮も、御用材を伐採する「御杣山（みそまやま）」の山の口に坐（ま）す神を祀り、伐採と搬出の安全を祈る祭りである「山口祭」から、遷宮完了のお祭りまで、33に及ぶ祭典・行事が目白押しの8年間の歳月と、約580億円のコストをかけたものでした。現在、「神宮式年造営庁」が、この式年遷宮というプロジェクトを推進する主体となっており、また、その財政上の基盤は、財団法人・伊勢神宮式年遷宮奉賛会が担っています。

遷宮において最も大切で大変なことは、建て替えに必要な檜などの木材の調達になります。必要とされる用材は、新たに造営される殿舎として、両宮正殿、宝殿外幣殿、御垣、鳥居、御饌殿（みけでん）、14の別宮等諸殿舎、計65棟に及びます。遷宮に必要な用材（檜）の総材積は約8500立方米、本数にすると1万2千本以上になります。全体の7割を占めるのは、直径50～60センチの樹齢200年前後のものになります。中には、棟持柱（むなもちばしら）に用いる檜は、直径1メートル余、樹齢500年余りの巨木になります。

この1万2千本の御用材から、8万点以上もの部材を取る「木取り」作業が行われます。この作業を担っているのが、山田工作場であり、その一つの工作棟には、6～8名の小工（こたくみ）が従事しています。内訳は、棟梁、副棟梁とその他の小工たち。棟梁が、全体の監督にあたり、副棟梁が、若手の指導・監督を担う。棟梁、副棟梁は、60歳前後で、前回の遷宮経験者、他は40歳前後が多く、20代前半の人もいます。その構成が、8班に分かれて作業を行い、4班が内宮、残りが外宮の部材の加工を行っています。

その昔、鎌倉時代までは、伊勢神宮の周辺、伊勢の地で伐り出されていました。しかし、この御用材も、回を重ねるごとに遠くの山に良材を求めることになり、江戸中期から木曾山が御杣山と定められ、現在は木曾の国有林から伐り出されています。伐採された檜は、木曾から伊勢まで運ばれ、伊勢市内を神領（神社の領地だった地域）の住民の手によって神宮まで奉曳されています。

そのため、大正12年（1923）からは、200年計画で神宮の5500ヘクタール（甲子園球場の1400倍）の神様の山の一面にて、毎年植樹が行われています。この200年をかけたプロジェクトは、一代では終わらないため、営林部に働く五世代、あるいはそれ以上の方々が、次々引き継いでその木々を育てています。

これは、西欧の大聖堂建築と同等かそれ以上の長期的な取り組みです。しかも、植樹という文化が『日本書紀』に載っていることから、少なくとも『日本書紀』が完成した720年には、植樹するという叡智や感性が日本にあったという事実に驚き、また感動します。

別宮の瀧原宮の棟持柱が作れるほどの巨木が嵐で倒れた際、その年輪を調べると、樹齢300年だった。通常手を入れない木の場合、その大きさになるまで、5、600年はかかるようですが、人が枝打ちや下草の整理などの手入れをすることで、二倍のスピードで成長していることがわかりました。

檜を植えてから30年～40年経った頃に林を見てみると、ずば抜けて良い木と劣勢な木の優劣がはっきりしてきます。植える時は、1ヘクタール（100m×100m）に、4000本植

えるが、200年の間に100本まで減らし、良木を育てる、といわれています。

今回の遷宮では、約700年ぶりに、昭和2年（1927）に受けた御用材の育成林が、3割ほど使われた、といいます。完全に神宮の山の木から調達できるまでには、あと100年ほどかかりますが、着実に進んでいます。

山田工作場の第一番萱小屋では、御社殿の屋根を葺くため、萱の加工を行っています。遷宮に必要な萱は、約2万3千束。これらは10年ほどかけて、神宮近郊の専用の萱山（かややま）から集められます。毎年、12月中旬から3月にかけて収穫された萱は、まず、乾燥小屋に入れられます。虫が湧くのを防いで自然乾燥させるために、萱小屋は、高床式風の建物になっています。適度に乾燥したものから仕分け作業が行われます。基本的に葉は残し、曲っているものを撥ねていきます。さらに、長い萱を、2.4メートルに切りそろえ、束にして乾燥小屋に戻す。これらの萱に穴を開け、竹串に差して40本ほどの萱を繋ぎ合わせていく。これを「蛇腹」というが、雨漏りを防ぎ、また見た目も美しくするため、萱を斜めに繋ぎ合わせていくものと、真っ直ぐにつなげるものなど、幾種類かの方法があります。また、宮大工だけでなく、この屋根を葺く萱工もその養成が課題となっています。

遷宮では、社殿だけではなく、御装束神宝（おんしょうぞくしんぼう）も、古式のまま新たに調達されます。

「御装束」とは、神様の衣服や服飾品をはじめ、神座（しんざ）や殿舎の舗設品（襖（ふすま）、帳（ちょう）、幌（とぼり）など）、遷御行列の威儀具（翳（さしは）、蓋（きぬがさ）など）などの品々の総称です。

翳：鳥の羽などで扇形につくり、長い柄をつけたもの

蓋：絹を張った長柄のかさ。昔、貴人の外出の際、後ろからさしかざしたものの。

「神宝」とは、紡績具、武具、馬具、楽器、文具、日用品など神様の御用に供する調度品を指します。遷宮において新たに調達される御装束は、525種、1085点、神宝が、189種、491点で、付属品を加えると、総数約800種、1600点にのびります。

これらの品々の調製のための素材は、織物16種、1158巻、組物（くみもの）15種、956条、刺繍3種、48文、木竹類12種、玉石類13種、動植物類15種、漆260キログラム、染料など全部で80種類にのびります。

これらの素材を使って、いつの時代の遷宮でも、当代最高の技量を持つ各々の分野の美術工芸

家・・染織、組、木工、金工、漆工などの分野の伝統工芸技術者が調製にあたります。第 60 回神宮式年遷宮の付帯事業として設立された財団法人日本民族工芸技術保存協会が、これらの御料の確保と技術者の養成などに努力されている、といます。

ところで、なぜ 20 年毎の遷宮なのでしょう。

小堀邦夫さんの『伊勢神宮のこころ、式年遷宮の意味』（*1）に、式年を巡る様々な説が紹介されています。

（イ）尊厳保持説

神宮の社殿は、檜の白木造りで、屋根も萱葺きであるため、常に清々しく尊厳なる姿を保つためには、20 年を限度として建て替える必要がある。しかし、「清々しく尊厳なる姿を保つ」のは、遷宮・・宮を新たに建て替える根拠の一つであり、式年の根拠ではありません。また、古代では、20 年毎ではなく、18 年目、19 年目にも実施される通例がありました。

（ロ）世代技術継承説

小工（こたくみ）（宮大工、木匠の意味）たちの伝統技術を次の世代に継承するためには、二十年が最も適切な区切りであるという説。

しかし、古代では、掘立柱に萱の屋根を特徴とする建築物は、神宮以外にも沢山あり、技術継承を心配する必要はなかった、といます。

（ハ）聖数説

国語の二（ふ）、四（よ）、八（や）を吉数（きつすう）と見、もとの二（ふ）を聖数と考え、その十倍の二十を満数とするとき、式年に符合するという説。

古代において、二、四、八が吉数であったとは考えられるが、その十倍が根拠となる証明はできません。

（ニ）朔旦冬至説

太陰太陽暦（旧暦）では、十一月一日（朔（さく））と冬至が重なる日が、19 年 7 か月ごとに巡ってくると、朔旦冬至（さくたんとうじ）と言って祝宴を催しました。

しかし、古代において、朔旦冬至のおこる年に、神宮の式年遷宮が行われた例は一度もありませんでした。

（ホ）一代一宮説

持統天皇即位 8 年（694）に藤原京が生まれる以前は、天皇の崩御に際会した宮は捨てられ、新たに新宮が造営された。しかし、一代一宮でない例もあり、また、一代が二十年であることも

ありません。

ところで、根拠はともかく、20年の定義はされています。

延長5年(927)に完成した『延喜式』には、二十年に一度の殿舎造替(でんしゃぞうたい)についての2種類の定めがあります。

(1) 太神宮(おおかみのみや)は、廿年(はたとせ)に一度、正殿・宝殿及び外幣殿(とのみてくらど)を造り替へよ。(その経費は)神税を用ひ、もし神税足らずんば正税(しょうぜい)を用ひよ。

(2) 摂津の国の住吉、下総の国、香取、常陸の国の鹿嶋等の神社(かみのやしる)の正殿は、廿年(はたとせ)一度(ひとたび)改め造り、(その経費は)神税を用ひよ。もし神税無くば、即ち正税を充てよ。

(1)は、神宮の式年遷宮を規定するものであり、(2)は神宮以外の式年遷宮を規定するものです。両者に共通しているのは、二十年に一度(式年)殿舎を造替し、遷宮を実施することと、その経費を税でまかなうことの2点です。

税は、租(そ)を貯えたものであり、それには神宮や神社のために当てることを最優先させる神税と、国家が管理している正税で補うという制度でした。

『延喜式』に先立って、養老二年(718)に成立した『養老令』には、税についての定めがあります。「飯(いい)を乾した「糲(ほしい)」「乾飯(かれい)」は二十年間の貯蔵としなさい」とある。これに基づき、高床式穀倉の中に、糲・・古代のフリーズドライ製法による食料は、麻袋に詰められて、細心の注意のもと管理されていました。つまり、式年が二十年の根拠は、稲を基軸とする穀物の生産と備蓄から生まれたと考える、という考え方もあると思います。

最後に、巨大建築物の事故というと、2012年12月に起こった笹子トンネルの天井板落下事故がいまだに記憶に残っています。

現代の高速道路やダム、橋梁、そして、下水道施設などの巨大建築物はもちろんのこと、大規模システムにおいても、伊勢神宮のように式年遷宮の方式を意図的に取り入れるべきではないでしょうか。そうするところで、その構築物の耐久性など品質と安全を確保すると同時に、人材の育成と技術の継承が担保されることになると考えています。

(*1) 小堀邦夫『伊勢神宮のこころ、式年遷宮の意味』淡交社 2011年刊

(*2) 『神社検定公式テキスト4「遷宮のつぼ」』(神社検定公式テキスト4)神社本庁(監修)、2013年刊